



Title	「雪の女王」：その中にみる男女の元型
Author(s)	岡田, 令子
Citation	IDUN. 1976, 3, p. 35-59
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/95892
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

「雪の女王」

——その中にみる男女の元型——

岡 田 令 子

THE SNOW QUEEN

—Two Elements of the Rose and the Frost Flower—

Reiko Okada

One of H. C. Andersen's masterpieces, the story of THE SNOW QUEEN is totally in the form of various female characters, yet it is distinctly divided into two contrasting parts: namely female and male characteristics, the female is represented and symbolized by the rose, the sunshine, Spring and the girl, Gerda, who is making a journey through different aspects of a woman's life; the male by the frost flower, the snow, Winter and the boy, Kay, under the spell of the snow queen. By examining these elements we see in this story the archetypes of man and woman.

Also Andersen's unique style, using the snow queen as a everlasting presence is felt. Often indirect and negative way of depicting the snow queen makes her existence more charming and mysterious; and Andersen's animistic religiousness and its naive nature is briefly clarified.

H. C. Andersen (1805—75) の童話 ‘人魚姫’ に関する小論で,⁽¹⁾ 筆者は先に、デンマークにおける ユング派の心理学者 E. Nyborg の行った Andersen の童話の研究の一端を紹介し、上記の作品の中に作者の内的世界を考察した。そこに見られる問題は Andersen 個人の内面と深く関わ

っているものであるが、それが同時に、人間が共通にもっている普遍的な無意識の問題とも関わるものであることを指摘し、更に、この作品が適格な象徴と美しいイメージに満たされていて、文学的にみても極めて優れた作品であり、Andersen の非凡な才能の結晶であることをも合せて鑑賞した。

つづいて今回は、アンデルセン研究の一環として、‘雪の女王’ (Sneedronningen—以下 Sd. と略す) を取り上げ、そこに登場する ‘男の子’、‘女の子’ に表現される二つの要素を分析、考察し (Ⅰ)、次に雪の女王の現れ方を中心に物語の表現方法を見てゆき (Ⅱ)、最後に二三物語に興味を添える事柄についてもふれてみる (Ⅲ)。

Andersen (以下 A と略す) の童話、‘雪の女王’—Sd.— は、丁度彼が40歳の時 (1845)、作品集第二巻 *Nye Eventyr* [新童話集] の中で発表された。作品の成立した時期についていえば、冒頭の部分、すなわち ‘魔法の鏡’ と呼ばれる物語は、A がドイツ旅行中、Dresden 近郊にある Maxen 城で、1843年の11月に書かれたものであるが、本文にあたる残りの部分、すなわち Kay と Gerda の物語は翌1844年の12月5日から8日の4日間に一気にまとめられたという。(cf. Brix 204)

この作品が発表された年に先立つこと10年の1835年から42年までの間に、A は初期の童話作品を *Eventyr fortalte for Børn* [子供のための童話] にまとめて出版していた。しかし、この作品集は題名の故に、その童話作品は子供のためのものであり、大人の鑑賞には耐え得ない、つまらないものだとの印象を当時の一般読者に与えていた (cf. Albeck 575)。⁽²⁾ このことに気付いた A は、1843年から1848年に第二集を上記のように改題して発表したのである。そして、この Sd. が発表された頃から1850年頃までの数年の中に、A は童話作家としても、その名声を博したのである。⁽³⁾ その頃彼は、スウェーデンの歌姫 Jenny Lind と既に知り合いになっており、彼女は A の心の中で重要な位置を占めていた。そのことは、彼の研究者の

一人、Topsøe-Jensen が次のように言っていることからもうかがえる：

“彼の人間としての発達は、大たいにおいて、1846年に終りを告げている。Jenny Lind に対する愛は、彼の人生に深い轍を印した最後の出来事であって、その後の経験は、ほとんどが旅行者としてのものである。” (cf. Efterskrift: Mit eget Eventyr 201)

このように見る時、A の作品 *Sd.* は、彼が社会的名声をゆるぎなきものとした時期であったばかりでなく、個人的にみてもその人生の絶頂にあった頃に生まれた童話であると言える (cf. Nyborg 123)。

この *Sd.* は、ある冬の日、寒波がおそった時に、A の心が一種の喜びに満たされて、“まるで物語が紙の上に跳びはねていくよう”⁽⁴⁾ (cf. Brix 204) に創作の筆が運んだという。これは前述のように、彼の絶頂期のほんの数日に書かれた作品ではあるが、しかし、その元のイメージは幼い頃に芽生えていたのではないかと思われる。(cf. Nyborg 135)

氷の花を一人の女性にみたてることは、まだAの父が生きていた頃にさかのぼる。ガラス窓についた氷が、両手を差し出した少女に似ていたので、父が冗談まじりに、“あの少女はきっと私を欲しがっているんだ!”⁽⁵⁾ (cf. *Mit eget Eventyr* 17) と言ったという。また、そんな父が亡くなった夜、母は夫のことを思い出して、こおろぎに次のような独言を言った：“……氷の少女があの人を取ってしまったんだよ。” (cf. *ibid.* 17) 父のこの悲しい死は、Aの11才のことであったから、約30年にもわたる長い間、彼の中に‘氷の少女’のテーマが生き続けていたと見ることができるであろう。

以上のような、Aの個人的なエピソードとは別に、この‘氷の少女’は北欧古来の言い伝えとも深いところで関係をもっているようである。

北シエラン（ジューランド）の民話では、窓にやって来て、そのガラスに氷の花 (*isblomster*) を吹きつける老婆 (*en gammel kone*) がいる (cf. Nyborg 135) といい、またスエーデンでも山々の頂に雪を吹き下ろす魔法使の女 (*trolldkvinde*) がいる (cf. *ibid.* 135) ともいう。このように、言

い伝えや民間信仰の中で、氷や雪が不思議な自然の力の顕われとみられ、ある時には *gammel kone* として、また、ある時には *troldkvinde* として捉えられているのである。いずれにせよ、冬の自然現象の背後に、このように一人の女性の力が働いていると見ていることは興味深い。‘氷の少女’→‘老婆’→‘魔法使^{トロール}の女’のイメージは更に、Aによって‘雪の女王’というイメージへと童話の中で高められ、*Sd.* という作品に結晶し、単なる一国民の民話にとどまることなく、広く世界に知られる文学作品となったのである。

I

作品が出来上るまでのいきさつは以上のようなものであったが、Aの内面生活は世間の名声や前述の Lind との経験とはうらはらに、満ち足りたものではなかった。幾度かの失恋の痛手⁽⁹⁾をこうむっていた上、情緒も不安定な性格⁽⁷⁾で、ちょっとした自分の作品に対する他人からの批判にも一喜一憂するという風で⁽⁸⁾、心理学的にみても、問題のある人であったらしい。⁽⁹⁾ *Sd.* を執筆当時のAは Lind 嬢に恋していたが、この女性によってAの切実な願いであった結婚はかなえられなかった。⁽¹⁰⁾ ‘Jenny の中にある何かが、自分を女性として完成させてくれる男性を求めていたのであり、彼女の中のその何かが、Aが、彼女の目的にはかなわない男性であることを知っていたからだった’ (cf. Garde 184) という言葉は、多くのことを示唆している。

Aは幾多の知人や友人を持っていたが、その性格の故に、常に孤独の苦悩になやんでいたようで、その苦悩から救われるための、ただ一つの道は童話を書くということであった (cf. *ibid.* 230)。童話を書くということは、彼にとって、自然な自分自身でいられるという、魂の平和と安らぎを感じることのできる幸福なときであったと思われる。

それ故、特に童話作品は、その‘自然なAの姿’を何らかの形で反映

するものであっても不思議ではないのである。Sd. を取り上げた研究者 Nyborg は、その作品分析を通じて、A の内部が心理学的にみて、堂々めぐりをしているだけであることを明らかにし、⁽¹¹⁾ この Sd. の中に人間 A の悲劇をさえみてとっている (cf. Nyborg 155)。また、前述のように、Sd. 執筆当時に愛していた女性が、それがたとえ意識的であれ無意識的であれ、彼の中に男性的なものを認めることができず、彼の求婚に応じなかったという、別の心理学者 Garde の研究結果を見る時、A の中に男性的なものが欠除していたことは、また、彼を取りまいていた女性たちの一致した意見でもあったであろうと筆者には思われる。

そこで前回とは見方を変えて、この小論において、Sd. にかかなり濃厚に現れている⁽¹²⁾と思われる、しかも、A の人となりを判断する際に無視できない、男性性、女性性という観点からこの作品を考察していきたい。

Sd. は更にこまかく 7 つの小さな物語に分けられていて、その概略は次のようなものである：

1) 悪魔^{トロール}が一枚の魔法の鏡をつくり、人間の醜惡なところを映してあきたらず、天へ上って、神をからかおうとしたが、途中で鏡が笑い出したために取り落とし、鏡は粉みじんになって世界中へとび散る。(鏡とそのかけらについての物語)

2) ある町に Kay, Gerda と呼ばれる二人の仲良しの男の子と女の子がいたが、男の子の目と心臓に上記の鏡のかけらが入り、その魔法の力のために、物の見方が変わってしまう。ある冬の日、Kay はソリを肩に滑りに出たまま、雪の女王と一緒にどこかへ行ってしまう。Kay は友だちの Gerda や家のおばあさんのことを忘れて、雪の女王と暮らすが、一方、急にいなくなった友だちの身の上を案じた Gerda は Kay を探しに出かける。(男の子と女の子)

3) 美しい花園をもったおばあさんのところへ着いた Gerda は、そこでしばらく逗留するが、おばあさんは彼女を手元にいつまでもおいておき

たいと思い、Gerda に Kay を忘れさせようとする。しかし、Gerda の涙でやがてバラの花が土の中から出て来て、彼女は思い出して、また旅をつづける。(魔法が使えるおばあさんの花園)

4) 花園を出た Gerda は、鳥に導かれ、王女と結婚した男の子が Kay だと思って宮殿へ行くが、それが間違っていたことがわかる。(王女と王子)

5) Gerda は山賊に襲われるが、その娘である 野性的な女の子に助けられ、トナカイにのり、鳩の言葉にしたがって、Kay のいる北の方へと向う。(かわいい盗賊の女の子)

6) トナカイは Gerda をラップ人の女のところへ連れていき、さらに、賢いフィン人の女のところへと案内する。この女の人は、雪の女王の居場所を告げ、どのようにすれば Kay を取り戻せるかを教えてくれる。(ラップ人のおかみさんとフィン人のおかみさん)

7) Gerda は雪の女王の夏のキャンプ場へ着き、教えられた通りにして、女王の留守中に Kay を救い出し、二人で元のおばあさんのところへ帰る。(雪の女王のお城で起ったことと、その後の出来事)

以上概略を述べたが、次に、各々の物語の内容を、物語の進行の順にしたがって、先に述べた観点から、興味あると思われる点を取り出してみてゆくことにする。() 内の数字はテキストの頁を示す。

1) 鏡とそのかけらについての物語

この物語は、これだけで独立しており、Troldepejlet (トロルの鏡) と呼ばれて、デンマークの人々に広く知られているものである。(cf. Nudansk ordbog 1028)。

Nyborg によれば、古来、多くの民族によって、鏡は種々なものの象徴として用いられて来ており、そのシンボルとしての価値は高い。鏡は事物をあるがままに映す性格をもつが、その反面、左右が反対に映ることや、また目の前にないものを映し出すところの一種の魔力をもつともいわれ

たりしている。明るい物の象徴—太陽,⁽¹³⁾ 光の源、澄んだ女性の心、真実を告げるもの、良心など—としても、またその逆に暗いものの象徴—悪魔など—としても用いられている。古ノルド語の *skuggsjá* は鏡を意味するもので、‘影’を意味する語 *skuggi* と同じ語であることから、鏡の持つ相反する二つの意味がうかがえる (cf. Nyborg 124—126)。

この物語の中では、醜いものや欠点を拡大して映し出す鏡が登場してくる：

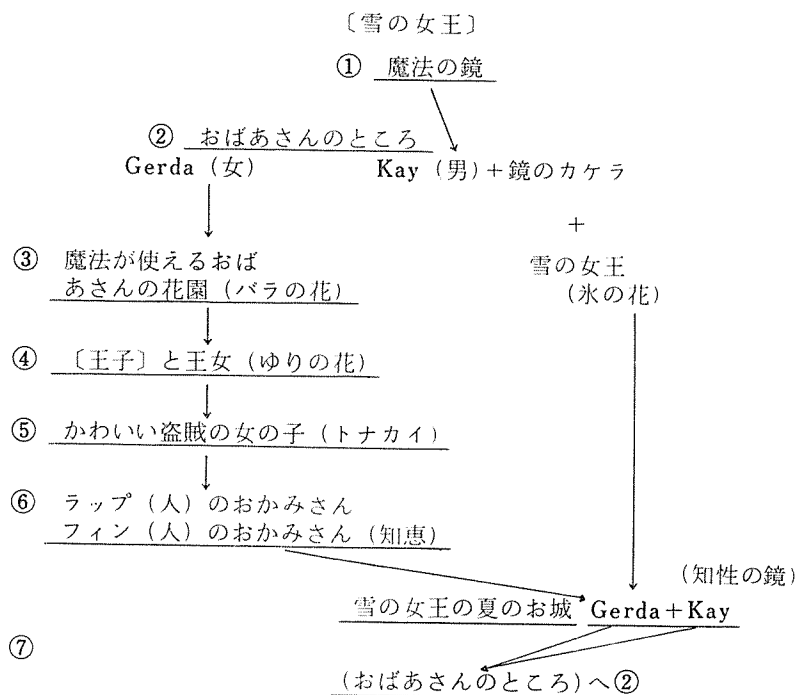
.....alt Godt og Smukt, som speilede sig deri, svandt der sammen til næsten Ingenting, men hvad der ikke duede og tog sig ilde ud, det traadte ret frem og blev endnu værre. (270)

この鏡は トロルによって 作られたものであるが、トロルは北歐で古くから、非常に人気のある幻想の世界の住人で、今日でもデンマークの子供の玩具箱の中に必ず一つは入っているものである。善玉にもなれば悪玉にもなって登場し、皆、多少とも超自然的な力を使える。しかし、Sd. に登場するトロルは悪玉であり、悪玉—‘Dævelen’ (270)—と同義である。トロルたちはこの鏡で、神や天使を映して、からかおうと天に上るが、鏡がげらげら笑い出して途中で彼らの手から滑り落ちてしまう。このトロルの鏡に神が映し出されると悪魔の顔が映ただろうと思わせるような書き方がなされており、ここで神と悪魔というものが、実は一つのものゝ裏と表であるのではなかろうかと読者にも思わせる点が注目される (cf. Nyborg 126)。さて、その鏡のかけらが人間の目に入ると、その人には物事の悪い面だけが拡大されて見え、心臓に入るとそれは氷のようになって、一層悪魔をよろこばせることになる：

.....og hvor de kom Folk i Øinene, der blev de siddende, og da saae de Mennesker Alting forkeert,nogle Mennesker fik

endogsaa en Lille Speilstump ind i Hjertet, og saa var det ganske grueligt, det Hjerter blev ligesom en Klump Iis. (271)

この 1) の物語は全体の Sd. の前書きの役を果たして、その創作の時期が前述のように異なるだけでなく、2)～7)の物語とは、質やレベルを異にしている。つづいて本文にあたる Kay と Gerda の物語へ入っていくのであるが、二人の子供は最初是一緒にいるが、後で別々になり、また最後で一つになる。この両者の通過する世界：Kay と雪の女王の世界を右に、Gerda と彼女の経験する人生の断面にふれるものを左において図解してみる。



上記の図をみると、男の子と女の子が入ってゆく場所が、お互に 相容れない二つの異った世界であることがはっきりしてくる。男の子の方は、

氷、夜、知性、女の子の方は、バラ、太陽、昼間、また、感情といったもので占められている。この二つのものは、何か一般的に男性的、女性的といわれている時のイメージとも結びついているようであり、心理学者のいう、アニマ、アニムスとの関係を思わせるものでもある。⁽¹⁴⁾ 以下各々の世界を、上記の問題を念頭において解釈しその対立を明確にしてゆくことを試みる。

2) 男の子と女の子

ここになって物語の主人公である Kay, Gerda, 雪の女王が登場してくる：

De var ikke Broder og Søster, men de holdt ligesaa meget af hinanden, som om de vare det. (272)

男の子と女の子は兄妹ではなかったが、兄妹のように仲良しだった。このことは、最初二人が同質のものであったことを示している。二人はおばあさんの庭にいた。それはバラと太陽によって象徴される幸福な世界であったが、それに対して異った性質をもつ‘雪’がちらちら顔をみせはじめ、前述の鏡のかけらが Kay の目と心臓に入ることによって、バラが汚らしくみえ、Kay と Gerda はここで異質のものとなる。

Hans Lege bleve nu ganske anderledes end før, de vare saa forstandige. (275)

すなわち、男の子はバラと太陽の世界を馬鹿げていると思うようになり、すべてに理窟っぽくなってしまふ。そして遂に、彼はバラよりももっと完全なものは雪の花だと思ふようになる。雪の女王と一緒に Kay はどこかへ行ってしまふが、だんだん彼は、雪の女王を申し分のない、全くどこにも欠点のない美しい人であり、すばらしい知性を備えた人としてみるよう

になる。ここに到って Kay を動かす力が変化し、暖かい太陽の世界、そしてまた、明るい昼間の世界から、冷たい月の世界、そして暗い夜の世界へと入るのである：

Om dagen sov han ved Sneedronningens Fødder. (276)

昼間 Kay が雪の女王の足元で眠る、ということは、Kay が、母親をたより切ってその側で眠る子供のように、すべてを雪の女王にまかせ、女王の力の統治下に入ってしまったことを意味している。また、彼が起きているのは夜であるということにもなる。

3) 魔法が使えるおばあさんの花園

Nu kom Vaaren med varmere Solskin. (277)

冬が去って春になり、Gerda の旅がはじまるが、この旅にははっきりした旅程表といったものがなく、太陽や燕と話している中に、Kay がまだ死んでいないと感じ、川の流れに身をまかせて出発するのである。この旅は意志、理性、推理などによるものではなく、偶然性、直観によって、運命のままに、感情のおもむくままになされることを意味する。

Nei! hvor her var en Duft og Deilighed! alle de tænkelige Blomster, og det for enhver Aarstid, stod her i det prægtigste Flor;……. (279)

行きついたところは、2)の物語の明るい色彩豊かな世界より、なお明るさと色彩の強調された、日の光のふりそそぐ花園のあるところである。ここで注目されるのは、バラの花の存在である。老婆は Gerda を自分の元

に引き止めておきたいばかりに、花園からバラの花を消してしまう。それは Gerda の大切な目的である、Kay を探し出すということを忘れさせるためである。だが彼女は、おばあさんの帽子に描いてあった飾りのバラをみて、昔のバラのあった時を思い出し、庭に出たがバラがないので涙を流すと、その涙でバラが地上に現れて Gerda と話し、彼女に Kay が生きていることを確信させる。花園にある多くの花の中でバラのみが彼女と重要な関係をもっていることをみる時、バラと女性は不可分の関係にあり、‘Aのバラ’についての考察は、一つの興味あるテーマとなる (cf. 並河 2, 10)。この物語に出てくる老婆の性格は、子供をかわいがるばかりに、その成長をはばんでしまう、女性あるいは母性の中にある否定的な面の女性性を代表しているといえそうである (cf. Nyborg 145)。

4) 王子と王女

白い雪の上で一羽の黒い鳥に会い、鳥の話から、最近この国の王女と結婚した青年が Kay だと Gerda は思い込む。彼女はそこで鳥の案内で王子と王女の寝室にしのび込む。

.....to Senge,den anden var rød, og i den var det at Gerda skulde søge lille Kay. (288)

ここには、不安も動揺もない理想的な王子と王女の結びつきがあり、Kay と Gerda の物語全体を貫くテーマの縮小された姿がみられる。彼らの最終的な姿もこのようにありたいと Gerda も願うであろう。だが、その目的が実現されるためには更に旅を続けなければならない。というのも、王子は Kay ではなく別の人物であったからである。Gerda はあまり賢くない、鳥の言葉から、Kay を理想化しすぎていたのだが、ここで男女の自然で完全な結びつきをみた Gerda は Kay を探し出さなければならないと新たに決心を固める。

5) かわいい盗賊の女の子

Gerda は王女から贈られた豪華な馬車で 森にやって来ると、盗賊におそれ、生命を失いかける。この森の中の描写は、4)の物語の非常に洗練され、華かな宮廷内の様子とは対照的で、力強い野性味をおびている。粗暴な山賊たち、荒れるにまかせた彼らの城、そこでは人間は鳥や獣と一緒に部屋に住んでいる。そして、野性的でたくましいが、同時に情にもろく親切な娘が Gerda の味方になる。

.....og den lille Pige trak en lang Kniv ud af en Sprække i Muren og lod den glide over Rensdyrets Hals; det stakkels Dyr slog ud med Benene, og Røvepigen lo og trak Gerda med ned i Sengen.
(292)

毎晩この女の子はトナカイの首をナイフでくすぐり、トナカイが恐ろしがるのをみて喜ぶ。そしてナイフを手にしたまま眠るといった風である。前の物語の鳥はまちがっていたが、今度は賢い鳩が教えてくれ、Kay の居所は北極に近いフィンマーケン—Finnmarken—にある雪の女王の夏のキャンプだという。山賊の娘は親切にも Gerda に、その辺の事情に明るいトナカイの ^{Bæ} を与え、北の方へ旅しやすいように助けてくれる。

ここでは大勢の鳥や獣が登場し、これらの助けで Gerda は正しい方向へ旅を続けるのであるが、人間が動物たちの援助を借りて行動するという表現は、我われの意識の無意識に対する態度を象徴的に表しているというが (cf. Nyborg 151), Gerda の場合も、彼女は非常に積極的な無意識の誘導に従って、直観によって行動することを意味している。

トナカイという北の国に住む動物に加えて、青・黄などの美しい光を放つオーロラも、一種の神秘的な雰囲気をも物語に与え、Gerda がかなり北の方へやって来たことがはっきりしてくる。

この物語の中心となっている盗賊の女の子は、素朴で男っぽい、Gerda

とは対照的に思われる女の子であるが、これは、教養とか文化を身につける以前の、自然に密着し、鳥や動物と‘住いを同じくする’先天的な女性の性質を代表していると思われる。

6) ラップ人のおかみさんとフィン人のおかみさん

黒い髪をし、目や皮膚の色の濃い平たい顔つきのラップ人たちは、伝統の中でも、また一般的にも、まわりに住む北の国々の人たちから、ある神秘的な存在としてみられており、また文学の中でも魔法を使う力をもつ者としてしばしば登場してくる。⁽¹⁵⁾ 最初 Gerda はトナカイにのってラップ人のおかみさんのところへいき、また、その人は紹介状を干した鱈の上に書いてくれ、そこからフィンマーケンに住むおかみさんのところへ訪ねていく。このおかみさんは人並すぐれた知恵と、自然を制する力をもっていて、世界中の風を操作できる程でもある。トナカイはこの人に Gerda に力を与えてやるよう頼むが、おかみさんは次のように答える：

Hun maa ikke af os vide sin Magt, den sidder i hendes Hjerte, den sidder i, hun er et sødt, uskyldigt Barn. (295)

Gerda には外から力が与えられるのではなく、すでに持ち合せている自分の力で充分であり、また、その力は彼女が優しい、頑是無い子供であること自体だといっている。Gerda は雪の女王と闘う用意ができていたが、その際重要なことは、魔法の鏡のかけらを Kay の目と心臓から取り出さなければならぬことであると教えらる。

Gerda は雪の女王の軍勢、すなわち悪魔を退けるのに、‘主の祈り’⁽¹⁶⁾を唱えるが、このことに関しては後で述べる。

Gerda を援けた二人の女性は、生活の知恵を持つ女性であり、積極的に子供の内的な成長を助長する面の母性、あるいは女性の性格を代表すると思われる。

7) 雪の女王のお城で起ったこととその後の出来事
先ず女王の城の様子をみてみよう。

Slottets Vægge vare af den flygende Sneder var over hundrede Sale,alle belyste af de stærke Nordlys, og de vare saa store, saa tomme, saa isnende kolde og saa skinnende.tomt, stort og koldt var det i Sneedronningens Sale..... (297)

沢山ある大広間はがらんとして寒く、空虚な感じを与える。中央に凍った池があって、雪の女王はそれを知性の鏡 —Forstandens Speil (272)—と呼び、この城にいる時は、そこが玉座になっているという。Kay も氷のかけらで遊んでおり、—Forstandens-Iispiilet (298) ‘永遠’ という字を探している。3)の物語で威力を発した Gerda の涙が、ここでも非常に大きな働きをする。彼女の涙はトロルの作った鏡のかけらを Kay の目と心臓から取り除き、Kay は暖かい感情を取り戻すことができる。Kay と Gerda のこの出会いによって、Kay の探していた ‘永遠’ という文字もひとりでにでき上るのである。そして二人は仲良しだった子供の時のように手に手を取って故郷へ帰っていくのである。

これらの内容をみてくるとき、物語の中に混然と、あるいは偶然に組み合わされたかのように見える個々のイメージが、実は、男の子と女の子の歩む明確に異なる二つの世界を提示しているように思われる。先にあげた図の右半分にある Kay の世界は、雪と氷の花や、月によって代表される色彩のない、硬くて寒々とした、淋しい空虚なところであり、また銀色の鏡のように冷たく透明で不毛の世界であるというならば、左半分にある Gerda のそれはバラと太陽のある、色彩豊かで暖かく、優しい世界である。また、右半分は理性の、そして知性の支配するところであり、左半分は、情緒豊

かな感情が力をもつところであり、直観、啓示、運命、信頼、洞察力、本能的な生きる知恵の支配する世界といえる。前者が超自然的で不可解な夜の魅力を感じさせるとき、後者は日常的でありふれてはいるが、やはり強い昼間の力を感じさせるものである。

このように Kay と Gerda を主人公にした Sd. の物語は、単なる荒唐無稽な童話の中の出来事にとどまらず、より深いものと結びついており、一般的に男性的なもの、女性的なものの‘元型’—archetype—⁽¹⁷⁾ が浮かび上ってくるのである。そして物語の終りに、Kay の氷遊びの材料と Gerda の涙が会って、‘永遠’という文字ができ上るのであるが、そこには古代から人類が見続け、多くの文学作品のテーマにもなってきた、天と地の対立、それらの結合、生成をも想起させるものがある。A の Sd. の中のイメージを通じて、人間が普遍的にもつ問題、神話の世界の新たな一つの形を辿ることができるのは大きな驚きであるが、まさに、A のこの童話の中に、我われが見取るものは、そう云った人間の永遠の、そして根元的な生の姿なのである。

II

この作品は‘雪の女王’というタイトルを取っているが、実際に物語を読んでもみると、雪の女王自身についての記述はあまり多くなく、物語の大半は Gerda の旅について書かれたもので占められている。しかし、題名があえて‘雪の女王’となっており、また読み終った読者の多くの者の中に残るものは、雪の女王のイメージであるのは何故だろうか。

先ず、雪の女王についての表現を本文にみてみよう。〔 〕中は意識である。

...et par Sneefnokker faldt derude, og een af disse, den allerstørste

blev liggende paa Kanten af den ene Blomsterkasse; Sneefnokken voxte meer og meer, den blev tilsidst til et heelt Fruentimmer, ... (273)

〔雪のひらが一つ二つ落ちてきて、その中で一番大きいのが花を植えてある木箱の隅に止って、それがだんだん大きくなって、一人の女の人になった。〕

...klædt i de fineste, hvide Flor, der vare som sammensatte af Millioner stjerneagtige Fnug. Hun var saa smuk og fiin, men af Iis, den blendende, blinkende Iis, dog var hun levende; Øinene stirrede som to klare Stjerner, men der var ingen Ro eller Hvile i dem. (273)

〔何百万とも知れない星のような雪のひらでできた、立派な白い着物を着ていた。それは美しい優雅な女の人で、その人は目もまばゆいばかりの氷でできていたが、生きているようだった。目は二つの明るい星のようだったが、そこには落ちつきはなかった。〕

...kom der en stor Slæde; den var ganske hvidmalet, og der sad i den Een, indsvøbt i en laaden hvid Pels og med hvid laaden Hue; ... (275)

〔真白にぬった大きなソリがやって来た。そこにふわふわする白い毛皮のオーヴァーを着て帽子をかぶった人が乗っていた。〕 Kay はそれに自分の小さなソリを結びつけて滑ったが、もう離そうとしても取れなくなった。その毛皮に身を包んだ人はにこやかに笑いかけた。

...Pelsen og Huen var af bare Snee, en Dame var det, saa høi og rank, saa skinnende hvid, det var Sneedronningen. (276)

〔彼女の毛皮のオーヴァーも 帽子も 雪でできていた。背がすらっと高く、輝くばかりに白い貴婦人であり、この人こそが雪の女王であった。〕

Kay saae paa hende, hun var saa smuk, et klogere deiligere Ansigt kunde han ikke tænke sig, nu syntes hun ikke af Iis, som den Gang...

...hun fløi med ham, fløi høit op paa den sorte Sky, ...

...om Dagen sov han ved Sneedronningens Fødder. (276)

〔……Kay はその人を見た。その人はたいそう美しかった。どの人よりも賢明で、すばらしい顔をしていた。……もうあの時のように、氷でできているとは思えなかった、……彼にとって、その人は申し分のない人のように見えた……もう恐ろしいとは思わなくなっていた……その人は彼を連れて、空高く大きな黒雲の上まで飛んだ。……(Kay は) 昼間は雪の女王の足元で眠った。〕

雪の女王についての描写は Kay と Gerda の物語の中では最初の物語 2) と最後の物語 7) においてのみなされている。その中で 2) に現われてくる箇所を上引用した。その各々が美しいイメージで満たされており、読者を魅了させるものであるが、更に春という季節とあくまでも対立するものとして提示されていることに注目しなければならない。2) の物語は春で始まっており、次に冬になり、また春がめぐって来て、それから再び冬になる。そこで少なくともこの物語の中だけで二年は経過しており、春には春の事物しか述べられておらず、同様に、冬にはまた冬の風景しか述べられていないが、季節の移り変りと共に必然的にこの両者が入れ替ってやって来

ることが、読者の心に植えつけられるのである。このような描写のテクニックによって、春は常に冬の存在を感じさせ、冬は常に春の存在を感じさせるものとなる。Kay にとってバラが醜いものと見た年の冬に、雪の女王が非の打ちどころのない女性の姿をとって彼の前に現れるのである。いわば、この春と冬は相反しながら、もう一方が他方を暗示するものとして設定されている。Kay がいなくなってから、Gerda は彼を取り戻すべく旅に出るが、それは春になってからである。そして3)の物語以下Gerda は様々な経験をしていき、その間、雪の女王の記述は本文に出て来ないが、読者には Gerda の活動を前述のような見方で読み進んでいく用意ができていたのである。その上、Gerda 自身も雪の女王と闘うべく旅を続けるのであるから、彼女に属する事物や経験を読み進む時、常に雪の女王の存在を念頭に置き、そのイメージをだんだん形成していくことになる。雪の女王は、言葉を代えて云えば、‘Gerda の……ではない’という否定の形で常に語り続けられるのであり、これによって雪の女王の存在はますます確かなものにされてゆくと共に、一方、彼女の存在はとらえがたく、またそれが雪の女王を神秘的なものとして読者の心に残すゆえんとなる。

7)の物語で、Gerda は Kay のいるところに辿りつくが、そこは雪の女王の夏の住いであり、美しい雪と氷と風とオーロラのイメージで満たされているが、女王自身は不在であり、その上、彼女についての直接の描写はここでも避けられていて、ただ読者は自分の想像でもって、雪の女王について思いをめぐらすのみである。

I 章において Sd. が、その内容において、人間の根元的、また、普遍的なものに関わっていることを述べたが、また文学上の表現という観点からも、Sd. は読者のイマジネーションに訴える暗示的な手法を用いて書かれていて読者に強い印象を与え、いつまでもその心に残る極めて優れた作品となっているといえるのである。

表現に関してなお忘れてならないのは、物語の意味内容がかなり複雑で

深い問題を含んでいるにもかかわらず、Sd. は平易な口語体で、しかも飾り気のない簡潔な文章で書かれていることである。それについてA自身は次のように云っている：

‘Jeg har ganske skrevet dem, som jeg ville fortælle et Barn dem.’
(D. L. Historie vol. II 574)

〔一人の子供にそれを話して聞かせるように書いたのです。〕

当時としては、この口語体は非常に新鮮で珍しい試みではなかったかと思われる。⁽¹⁸⁾ 物語の初めにある、‘See saa! nu begynde vi.’ (270) や ‘Nu skulle vi høre!’ (271) などの短くて勢いのある表現を含んだ文体は、物語を実に生き生きとしたものにしている。これらはAの文体の一つの著しい特色⁽¹⁹⁾として、強調されるべき点であろう。

III

これ迄の章においては述べなかったが、A個人の日常生活の一端が、そのまま作品の中に顔を出し、それなりの面白味を添えているので、ついでながらそれら二三の事柄をあげておく。

“det maa være kjedeligt at staae paa Trappen, jeg gaaer heller indenfor!.....
...hans Støvler knirkede saa frygtelig stærkt, men han blev dog ikke bange!” (286)

王女が、一番話し上手な青年と結婚するとおふれを出し、一人の若者が宮殿へやって来る。〔階段のところに立っているのは、たいくつだろうね。

ばくは奥へ通るよ。……その子の長靴がきゅーうと、とても大きな音を立てたのに、その子はそんなことで恐ろしいとは思わなかったんだよ。]

Aはしばしば王侯貴族の住居を訪問し、童話を話して人々を楽しませていたが、それは彼の誇りの一つとなっていた。⁽²⁰⁾ この‘ボロをまとった’話し上手な青年がおくすることなく宮殿に進んで行く様はA自身を思わせ、また堅信札の折、彼は新しい長靴をはいて、非常に有頂天であったことが自伝の中で述べられている。(cf. Mit eget Eventyr 24)

“Vilde I flyve frit?” spurgte Prindsessen, “eller vilde I have fast Ansættelse som Hofkrager med Alt, hvad der falder af i Kjøkkenet?”/Og begge Kragerne neiede og bade om fast Ansættelse! for de tænkte paa deres Alderdom... (288)

〔‘お前たち自由に飛びまわりたいのか、それとも宮仕えの鳥になって台所のおこぼれをみんなほしいのかね。’と王女はきいた。すると二羽の鳥は深々と足を引いておじぎをし、定職の方につかせて下さるようにお願いした。というのも年をとってからのことを彼らは考えたのだから。〕

A自身も王から年金をもらっていたし、また彼の頭の中には常に定収入のある生活ということがあった。それがこのユーモラスなくだりとなって物語の中に生かされている。

なお一つ気がかりになることは、Sd. の結末に聖書の引用が出てくることである。‘もし汝ら幼子の如くならずば、天国に入ることを得じ。’と云う聖句、これはI章でみて来た内容とは異なる要素である。Sd. をしめくくるにあたって唐突にAの宗教心とも云うべきものが現われてくるのはなぜだろうか。先の‘人魚姫’の場合 (cf. 拙稿 89) には、悲劇的な結末を迎えるに到った人魚姫に対する、何らかの救済としてキリスト教的な要素が現われたのであるが、⁽²¹⁾ このSd. の場合には、物語自体はいわゆるハッピー

ーエンドになっているにもかかわらず、この要素がでてくる。Aにとって、すべてのものの最後の救済として、これ以外のものは考えられなかったのであろうか。いづれにしろ、彼の心の中で、この宗教心が一つの大きな位置を占めていたであろうことは確かである。そこで、Aのこの宗教心とは如何なるものであったかを少しみておこう。

Garde はAについて次のように述べている：“H. C. Andersens religiøsitet, hans etik forekommer os barnlig, næsten tåbelig.” (Garde 229) Aの信仰心、倫理観は、われわれにとって子供らしく、ほとんど馬鹿げているように思われる、と。彼は早くからその母親に神を畏れることを習い、その後ラテン学校でも宗教の時間があったと考えられるが、彼は大人になってからも、これら幼い頃に植えつけられた、多少なりとも迷信的な宗教心を持っていたと思われる (cf. Nyborg 154)。

例えばこんなことがあった：Aが都へ出て来て間もない頃のことである。元旦に起ったことは一年中起ると信じていたAは、王室劇場へしのび込んで、主の祈りを唱えて、その年中良い役をもらいたいと祈ったという (Mit eget Eventyr 40)。作品 Sd. の中でも主の祈りは全く原始社会におけると同様、雪の女王の軍勢を追い払う呪文として用いられている (cf. Nyborg 152)。(296)

Aはデンマークの習慣にしたがって、新教の一派である、国教のルッター教に属していたが、心情的にはカソリック教の神秘的な雰囲気をもつ礼拝に魅せられていたようである (cf. Krüger 187)。そして、‘人生の後半には教会から遠ざかっていたと云われている。牧師たちの厳格な説教は彼の心を打たなかったようで、彼の魂はもっと自然へ向っていたのであり、そこでAは神を近く感じていたという’ (cf. ibid. 187)。即ち、Aの宗教観や感情は、決して神学上の抽象的な諸観念にのっとったものではなく、もっと自然発生的な、人間が原始社会から持ち続けて来たような宗教心と密接な関係にあるものであろう。A自身も自分が自然を愛したこと、その中で多くの童話が生れたことを自伝の中で記しているが (Mit eget

Eventyr 110—111), 実際この素朴な宗教心が彼をして、上記のようなA独特の童話⁽²²⁾を生むに到らせたものの一つであろうと思われる。このように見るならば、彼の作品内でみた限りでは不自然さを感じさせる宗教的な要素ではあったが、これをAの内面においてみる時には、他の要素と矛盾するものではないようである。

この物語には、長い年月にわたる時の流れと、大きな地理的な広がりを感じさせるものがある。即ち、物語の冒頭で子供であった者たちが、結末では大人になっていることに気付き、また、女の子の旅は南の方からはるか北極圏⁽²³⁾にまでのびているのである。

ここには様ざまな、その地方の特色を代表する人物、動物、花鳥、自然なども登場し、それらが半ば現実の、また半ば幻想の色調をおびて北歐という一つの絵巻物を織り成しているのである。しかし、この紋様は誰にも親しみ易く簡単なもので、この小論で指摘してきたように、男性と女性という普遍的かつ根元的な二つのものの姿を、美しい象徴の中に表現させているのである。

(1976年7月)

注

- (1) ‘人魚姫’にみられる H. C. A. の内的世界。
- (2) Man tog digteren alt for bogstaveligt på ordet, som om eventyrene kun var for børn, bagateller.
- (3) *Improvisatoren* (1835) で小説家として、*En Digters Bazar* (1842) で紀行文作家として既に名声を博していた。
- (4) ‘...at det dansede hen over Papiret.’
- (5) ‘Hun vil nok have mig!’

- (6) Riborg Voigt, Louise Collin などとの失恋。
- (7) 小さな出来事に対しても 子供のように 泣き悲しみ、 また よろこんだりした。
(Nybog 133)
- (8) 旅先で祖国の新聞に載っている自分の作品批評に敏感に反応した。(自伝 6. etc.)
- (9) A を精神病であるとの診断を下す学者もある。(Hjalmar Helweg, 拙稿93—94)
- (10) 1940年に初めて会い、1843年に求婚した。
- (11) 'Jeg opfatter således udgangen på dette A's vintereventyr som tragisk.
Ringene er sluttet. Dens sidste led følger sig til udgangspunktet.,
- (12) 男の子と女の子が出て来て、最後には一つになるが、その間様々な経験を経なければならぬというパターン。'錫の兵隊' や '野性の白鳥' など。
- (13) Nyborg は天照大神の鏡の事を述べている: ligesom den japanske solgudinde Amaterasus spejl, der egentlig er hendes incarnation, er opstået af guden Izanagis venstre øjne.
- (14) Jung の用いた心理学的用語。anima, animus (男性のこころの像・女性のこころの像)
- (15) 例えばフィンランドの Zacharias Topelius (1818—98) の '星のむすめ', デンマークの Karen Blixen (1885—1962) の '船のりの少年' など。
- (16) Kay も雪の女王のソリから 離れられなくなって、 恐ろしさのあまり主の祈りとなえるが失敗する。(テキスト 276)
- (17) Jung の用いた心理学的用語: 人間の普遍的無意識の内容の表現のなかに共通した基本的な型を見出す事ができると考え、ユングがそれを元型と呼んだ。(河合95)
- (18) Allerede Georg Brandes har gjort rede for den stilistiske revolution, gennembrudt af *talesproget*, ... (D.L.H. II 580)
- (19) 秀でた疑人法も特色の一つであろう。
- (20) デンマークの王侯貴族の住いばかりでなく、ドイツの Weimar 侯などの宮殿を訪ね、よくその内部の様子に通じていた。(Mit eget Eventyr 178)
- (21) 水の泡と消えた人魚姫を空気の娘と一緒に天に上らせ 300年後に天国入りさせること。(拙稿, 69)
- (22) Andersen har som digter bevaret forbindelsen både med barnets og den primitives *hele* verden. (D.L.H. II 585)

- ㊦ 雪の女王の冬の城は Spitsbergen にあるという。(現実には別名を Svalbard Islands, 北緯77°~82°, グリーンランドの東側に位置する) A の童話の中に現われる最北端の舞台であろう。

テ キ ス ト

Samlede Eventyr og Historier, Vol. I pp. 270—300

Gyldendals Tranebøger, Copenhagen, 1962.

参 考 文 献

- Brix, Hans: *H. C. Andersen og Hans Eventyr*, Gyldendals Uglebøger, Copenhagen, 1970.
- Duve, Arne: *Symbolikken i H. C. Andersens Eventyr*, Psycho Press, Oslo, 1967.
- Garde, Annelise: *H. C. Andersen og Hans Kreds, En Haandskriftstudie*, Nyt Nordisk Forlag, Arnold Busck, Copenhagen, 1967.
- Jung, C. G.: 人間のタイプ (高橋義孝訳) ユング著作集1, 日本教文社, 1973.
- Jung, C. G.: 現代人のたましい (高橋義孝・江野専次訳) ユング著作集2, 日本教文社, 1975.
- Jung: C. G. 人間心理と宗教 (浜川祥枝訳) ユング著作集4, 日本教文社, 1974.
- H. Kawai: (河合準雄) ユング心理学入門, 培風館, 1973.
- Krüger, Paul: *Studier i komparativ Litteratur*, Gyldendal, Copenhagen, 1968.
- Larsen, Svend & Topsøe-Jensen: *H. C. Andersens eget Eventyr i Billeder*, Berlingske Forlag, Copenhagen, 1952.
- Ministry of Foreign Affairs: *Danish Journal, Special Issue, Hans Christian Andersen*, Copenhagen, 1975.
- Nielsen, Erling: *H. C. Andersen*, Gyldendals Uglebøger, Copenhagen, 1970.
- Nyborg, Eigil: *Den indre Linie i H. C. Andersens Eventyr, En psykologisk Studie*, Gyldendal, Copenhagen, 1962.

その他の参考資料

- Albeck, Gustav Friis, Oluf & Rohde, Peter P.: *Dansk Litteratur Historie*,
vol. II, pp. 542—592, Politikens Forlag, Copenhagen, 1971.
- Billeskov Jensen, F.J.: *Anthologie de la littérature danoise*, p. 214, Aubier
Éditions Montaigne, Paris, 1964.
- Namikawa, Nobuko: ‘バラ・そのイメージと象徴’, 松陰女子学院大学研究紀要17号
pp. 1~19
- Okada, Reiko: ‘人魚姫’にみられる H.C.Andersen の内的世界, 言語研究双書 I
pp. 61~76, 大阪言語研究会日本ケルト研究会, 大阪, 1976.
- Sørensen, Villy: Efterskrift, *Eventyr og Historier*, pp. 391—403
Gyldendals Bibliotek vol. 11, Copenhagen, 1972.
- Topsøe-Jensen, H.: Efterskrift og noter, *Mit eget Eventyr*, pp. 197—202,
Lademann, Copenhagen, 1942.